

## 在宅医療検討部会ワーキンググループ活動報告

## 1 設置目的

24時間在宅ケア体制の実現に向けて、多職種連携等の取組内容を検討する。

## 2 構成メンバー

(別紙) のとおり

## 3 実施日及び主な内容 (2回実施)

	実施日	主な内容
第1回	令和6年9月2日(月)	多職種連携の構築に向けた課題、多職種連携で取り組みたいことについて意見交換を実施
第2回	令和6年11月26日(火)	第1回の意見を踏まえ、「制度の狭間にいる住民へのアプローチ」及び「見えないカベ」の問題についてグループワークを実施

## 4 活動概要

(1) 第1回目で出た意見を整理したところ、以下の7点の論点が挙げられた。

## 【論点】

- ① 在宅医療・介護連携は相当程度進んでいるが、連携の中で「すき間」が無いか
- ② MCSの利用に関するルールの検討
- ③ 制度の狭間に埋もれた方も多く、制度サービスだけでは対応できない地域課題へのアプローチ方法
- ④ 地域の中で、介護保険制度の理解や障害者理解の取組を推進(事前の制度理解)
- ⑤ 「(住民間の)見えないカベ」を崩すために、住民の生活の場へアウトリーチする等、専門職と住民の顔の見える関係の構築
- ⑥ 災害時も見据え、ハイリスク者を地域で把握できる体制づくり
- ⑦ 職種間の仲間意識を高める(他職種業務への理解・共感)

⇒上記の論点のうち、地域で直面している③「制度の狭間」と⑤「見えないカベ」の論点を優先課題として取り上げ、第2回目でグループワークを実施。

(2) 第2回目で実施したグループワークでは、主に以下のような意見が挙げられた。

<p>「制度の狭間」 について</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 立場や肩書関係なく、一人の人間として地域に入り、つながる姿勢が大事。</li> <li>・ セルフネグレクトの方など、見えない障壁を感じて自身を閉ざしてしまうため、心の隙間に寄り添いながら埋めていく必要がある。</li> <li>・ 行政の縦の情報に加え、住民同士の横の情報も得られるような情報プラットフォームが必要。</li> <li>・ 相談のための相談の場となると、遠慮する人もいるため、飲食しながら気軽に立ち寄れるような場が必要。</li> <li>・ 多世代が集い語れるような「ごちゃまぜの場」の機能が必要。</li> <li>・ 子ども食堂だけでなく、大人食堂で孤立した人のつながりを回復する試みがある。また、地域支援者が飲食をしながら語れる場をつくることで活動が有機的につながる。</li> </ul>
<p>「見えないカベ」 について</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「介護」や「福祉」というワードを使わず、言葉を変換して印象を代えられると良い。(例. 介護予防=「スポーツ」、デイサービス=「ジム」など)</li> <li>・ 抵抗感が少ない子ども世代から認知症や障害者理解に関する啓発などの教育が有効。</li> <li>・ 認知症の方でも障害者でも「そこに居て当たり前」という包摂的な空間を作ることが大事。</li> <li>・ 障害に限らず、知らないことで偏見が生まれてしまうので、住民への周知啓発は重要。</li> </ul>

⇒このような意見を踏まえ、事務局で「2040年に向けた共通の方向性」のたたき台を作成し、第3回で意見交換を実施する予定。

## 5 今後の予定

令和7年2月に第3回目を実施予定。実施結果については、第3回部会にて報告を行う。